

19世紀のサン・パウロの発展とイタリア人移民

伊藤 秋 仁

〈Sumário〉

O grande fluxo de imigrantes europeus começou na segunda metade do século XIX, mais exatamente após o ano 1880. A prosperidade da economia cafeeira do estado de São Paulo atraiu os imigrantes. Como não era mais disponível a mão-de-obra escrava, para maior produção de café, os fazendeiros de cafeicultura paulistas precisavam de imigrantes europeus.

Os europeus que pretendiam sair do país de origem e atravessar o Oceano Atlântica tinham três escolhas de destino: os Estados Unidos, a Argentina e o Brasil. A atração mais chamada no Brasil era a assistência da passagem ao Brasil do país de origem. O único estado que tinha bolsa para subsidiar os imigrantes era São Paulo. Os agentes de recrutamento de imigrantes percorriam primeiro no norte da Itália e depois no sul.

Os italianos que migraram para substituir o braço escravo foram trabalhar como assalariados nas fazendas de café. Os imigrantes nas fazendas enfrentavam condições de trabalho e de vida infortunadas, que o governo italiano proibiu a emigração italiana subsidiada. Alguns imigrantes que tiveram sorte conseguiram juntar recursos e se tornaram pequenos proprietários, porém, outros fugiram das fazendas e se dirigiram para a capital.

No começo do século XX, a maioria dos trabalhadores empregados na indústria eram italianos. As situações de trabalho e de vida também não eram favoráveis. Quando aconteciam adversidades, eles se reagiam de forma organizada, criando assim as primeiras greves na capital. No desenvolvimento progressivo da cidade, eles ocupavam atividades demandadas tais como motorneiro, jornalista, vendedor ambulante de frutas, verduras, peixes e flores, mecânico etc. E agora a importância dos descendentes italianos na vida de São Paulo é incomparável.

は じ め に

サン・パウロは中南米で最大の都市圏を有し、そのダイナミックな活力はブラジル社会や経済を牽引している。州境を接しているリオ・デ・ジャネイロとともにサン・パウロはブラジルを代表する都市であるが、両市には大きなコントラストが見られる。内陸部にあるサン・パウロと沿岸部のリオ・デ・ジャネイロといった風土の違いもその重要な要素であるが、人種・民族的に言えば、サン・パウロではイタリア系の人々の存在感が顕著であるのに対し、リオ・デ・ジャネイロでは肌の濃淡はあるがアフリカ系の人々が優勢であり、その姿が町のそこかしこで見られる。

イタリア系の人々はイタリア人移民の子孫であり、アフリカ系の人々はもともと奴隷としてブラジルに連れてこられた奴隷の血統を持つことは言うまでもないが、その起源は19世紀までさ

かのぼる。ブラジル南東部の19世紀中葉から後半は、コーヒー栽培が拡大し、その輸出が大幅に伸びた時期である。ほぼ同時期に奴隷貿易が終結し、奴隷が段階的に解放され、代替労働力としてイタリア人を主とする大量の移民がヨーロッパから導入された。19世紀後半から20世紀の初め、イタリア人移民と自由労働者となったアフリカ系の人々は、農村ではプランテーションで働き、都市部では労働者となった。サン・パウロ市ではイタリア人が、マタリオ・デ・ジャネイロ市ではアフリカ系の人々が、それぞれの町の都市化を担っていった。しかしながらその後の歩みは随分異なっている。イタリア系の人々の多くはサン・パウロで社会的な上昇を果たしているのに対し、リオ・デ・ジャネイロのアフリカ系の人々は、その多くが変わらず社会の下層を占めている。

本稿の目的はこのような人種格差を提示したり人種差別の存在を糾弾したりするものではなく、サン・パウロにおいてイタリア人移民がどのような道筋を辿ったかを描き出すものである。彼らは決して順風満帆であったわけではない。多くの者がよりよい生活を求めて数々の苦難を乗り越えていった。移民として社会の最下層の地位から上昇し、サン・パウロにおいて大きな影響力を持つようになった。そのようなイタリア人移民の来し方を、19世紀後半にコーヒー経済の拡大とともに開発され発展したサン・パウロの状況を背景にして論ずるものである。一方、ブラジル社会が持つもうひとつの側面として、アフリカ系の人々に対し社会的な上昇を阻んでいる人種差別が存在してきたことも忘れることはできない。そのような視点から見るとイタリア人移民には「追い風」が吹いていたとも言えるのである。

なお、本稿は、拙稿「ブラジル南部におけるイタリア人の入植」(『COSMICA』39号、2009年)を相互補完するものである。イタリア出国者の背景やその他の地方へ入植した移民の経緯などはそちらを参照していただきたい。

1. サン・パウロにおけるコーヒー生産の伸長

2-1 コーヒー栽培の興隆

18世紀前半にブラジルにもたらされたとされるコーヒーの種苗¹⁾は、ブラジルの気候に適応し、その栽培は国内各地に広がり示した。コーヒー栽培は、18世紀後半、ミナス・ジェライスの金の採掘の衰退と時を重ねるようになり拡大し、1760年頃にはリオ・デ・ジャネイロに達した²⁾。1808年にリオ・デ・ジャネイロに移転したポルトガルの王室は、国際的な競争力にさらされ劣勢となっていたサトウキビに替わる商品作物として、需要が増大していたコーヒーの栽培を奨励し、王立植物園で育成した苗木を分配した³⁾。当初はリオ・デ・ジャネイロ市周辺で行われたコーヒーの栽培は、未開拓地を求めてパライバ・ド・スル河⁴⁾の流域へと広がっていった。同河流域の気候はコーヒー栽培に適していたことと、同河は、金採掘の中心地であるミナス・ジェライスと主要な港湾を有すリオ・デ・ジャネイロの間に位置したことから、製品の移送を行う際、金輸出時に整備されたインフラを利用することができた。またそれまでの経済活動の拠点から程近かったため、活動の縮小に際して生じた遊休資本や労働力を効率よく活用することもできた。

1818年にはサントス港からヨーロッパに向けて7万5000ポンド(34トン)のブラジル産のコーヒーが輸出された⁵⁾。1821年の輸出量は、13万俵(1俵=60kg)に迫り、すでに全輸出品の中で、主導的な地位を占めていた。表1のとおり、コーヒーの輸出量は、1821年からの10年間で、300万俵を超えており、輸出全体の中のコーヒーの割合は18.4パーセントを占めた。1831年からの10年間では、コーヒーの割合は輸出全体の4割を超え、1830年代末には年100万俵、1840年代後半には年200万俵を超えた⁶⁾。1822年に独立したばかりのブラジルにとって、コーヒーは紛うことのない牽引力になった。

表1 ブラジルのコーヒー輸出(1821年-1900年)

期 間 (年)	輸 出 量 (1000 俵, 1 俵 : 60kg)	輸出全体に占める コーヒーの割合 (%)
1821-30	3,178	18.4
1831-40	9,744	43.8
1841-50	15,882	-
1851-60	26,253	48.8
1861-80	36,336	56.6
1881-90	53,326	61.5
1891-1900	74,491	64.5

出所) 富野幹雄「19世紀ブラジルの経済発展とコーヒー生産」『アカデミア』人文・社会科学編第66号, 抜刷, 南山大学, 1997年, 15頁。

表2 世界のコーヒー生産に占めるブラジルコーヒーの割合

期 間	割合 (%)
1820-30	18.2
1830-40	30
1840-50	40
1850-60	52
1860-80	50
共和制初期*	57

注 *共和制移行は1889年。 出所) 富野, 前掲書, 14頁。

2-2 生産地の移動

広大な土地と奴隷の労働力に立脚し、単一の商品作物のプランテーションを伝統的に行ってきたブラジルにとって、コーヒーはまさに好個の作物であった。19世紀前半、世界的に奴隷貿易ならびに奴隷制の廃止の機運が高まる中、ブラジルは駆け込み需要的に大量の奴隷を輸入した。農場経営者は、未開発の土地を開発し、大量の奴隷労働力を調達し、大規模農場を開設した。コーヒー農場の創設には少なからぬ資金を必要としたが、金や砂糖の生産が落ち込む中で、その資金を新規に勃興したコーヒーに集中することができた。ブラジル産のコーヒーは、このような

有利さを背景に、国際的なコーヒー市場において、生産量でも価格の安さでも他の生産地を凌駕し、市場を席卷した。コーヒーの生み出す大きな富により、帝政下、インフラの整備が進んだ。パライバ・ド・スル河流域のコーヒー生産は、1850年を迎える頃に最盛期を迎えた。

しかしながら処女地を大量に開発し⁷⁾、疲弊すれば移動するという原始的な方法は、農業技術の低さも相まって、次第に土地不足を引き起こしていった。コーヒー生産者には、土地の生産性や品質などを顧慮するという意識はなく、ひたすら資源を浪費する方法を探った。やがて新たに開拓する土地を求めて、リオ・デ・ジャネイロ県を離れ、隣接する地域に移動していった。西はエスピリト・サント県、北はミナス・ジェライス県、東はサン・パウロ県に向かった。中でもサン・パウロはパライバ・ド・スル河の上流にあり、移動が比較的容易であった。

2-3 鉄道の敷設とイギリスの影響

イギリスとブラジルの関係は、ブラジルの独立する以前のポルトガルのイギリスへの経済的な従属にその端を発しており⁸⁾、1808年、ポルトガルの王室がブラジルへ移転することで、ポルトガルのイギリスへの従属関係はそのままブラジルに引き継がれることになった⁹⁾。1810年にイギリスとポルトガルの間で通商航海条約と友好条約が締結され、ブラジルへ輸入されるイギリス商品に対する関税は、従価税15パーセントに定められた。その税率は、その他の友好国（24パーセント）に対するよりも際立って低く、宗主国ポルトガル（16パーセント）よりも低かった。同条約は1844年に失効したが、結果として、ブラジルにおける工業発展は阻害され、1822年の独立後も経済的には植民地的性格を維持することを余儀なくされた。

表3 19世紀中葉におけるブラジル輸入貿易の国別構成（％）

	1845-49年	1854-55年
イギリス	48.6	54.6
アメリカ合衆国	10.6	8.3
フランス	10.2	11.6
ポルトガル	9.4	6.9
アルゼンチン	5.0	6.3
ハンザ諸都市	4.9	5.6
スペイン	2.2	} 6.7
その他	9.9	
計	100.0	100.0

出所) 毛利健三『自由貿易帝国主義』東京大学出版会、1978年、280頁。

表4 19世紀後半のイギリスからの輸入品の割合(%)

期 間 (年)	繊維製品	繊維製品以外 の消費財	資 本 財	そ の 他
1850-54	72.55	9.82	14.23	3.40
1855-59	65.88	11.48	18.04	4.60
1860-64	68.02	10.69	14.90	6.39
1865-69	68.48	10.18	15.77	5.57
1870-74	57.39	9.78	26.01	6.82
1875-79	60.24	8.94	23.56	7.26
1880-84	56.54	9.26	26.93	7.27
1885-89	56.73	9.92	28.36	4.99
1890-94	48.85	9.20	36.79	5.16
1895-99	47.14	9.72	38.96	4.18

出所) 富野, 前掲書, 9頁より筆者が作成。

表5 19世紀のブラジルの主な輸出品の割合(%)

期 間 (年)	コーヒー	砂糖	ココア	マテ茶	タバコ	綿 花	ゴ ム	皮 革	合 計
1821-30	18.4	30.1	0.5	-	2.5	20.6	0.1	13.6	85.8
1831-40	43.8	24.0	0.6	0.5	1.9	10.8	0.3	7.9	89.8
1841-50	41.4	26.7	1.0	0.9	1.8	7.5	0.4	8.5	88.2
1851-60	48.8	21.2	1.0	1.6	2.6	6.2	2.3	7.2	90.9
1861-70	45.5	12.3	0.9	1.2	3.0	18.3	3.1	6.0	90.3
1871-80	56.6	11.8	1.2	1.5	3.4	9.5	5.5	5.6	95.1
1881-90	61.5	9.9	1.6	1.2	2.7	4.2	8.0	3.2	92.3
1891-1900	64.5	6.0	1.5	1.3	2.2	2.7	15.0	2.4	95.6

出所) Carone, Edgard, *A República Velha I*, São Paulo, Difusão Européia do Livro, 1972, p. 196

表6 19世紀のブラジルの貿易収支(100万ポンド)

1821-30年	-3.3
1831-40年	-5.1
1841-50年	-7.4
1851-60年	-11.5
1861-70年	+17.5
1871-80年	+34.5
1881-90年	+24.3

出所) 富野, 前掲書, 14頁

表7 19世紀にブラジルがイギリスにおいて調達した資金（ポンド）

年	金額	年	金額
1825-25	1,333,300	1865	6,963,600
1825	1,400,000	1871	3,459,600
1829	769,200	1875	5,301,200
1839	411,200	1883	4,599,600
1843	732,600	1886	6,431,000
1852	1,040,600	1888	6,297,300
1858	1,526,500	1889	19,837,000
1859	459,500	1893	3,710,000
1860	1,360,100	1895	7,422,000
1863	3,855,300	1898	8,613,717

出所) 富野, 前掲書, 19頁。

表3のとおり, 1844年の特惠関税撤廃以後も輸入におけるイギリスの突出した地位は揺るがなかった。19世紀の半ばに至るまで, 全体の50パーセントあまりを占め, 他国を圧倒した。表4のように, 1860年代まで, ブラジルは, 主として, イギリスから繊維製品を中心とした消費財を輸入し, 消費財の割合は輸入全体のほぼ8割を占めた。1890年以後, ようやく資本財の輸入が増加し始めたものの, ブラジルからの輸出品は, 19世紀を通じて一次産品が中心であり, その構造はほとんど変わらなかった。

表5からわかるように, 1830年以後, コーヒーはブラジルでもっとも重要な輸出商品となった。輸出に際してもっとも大きな問題は, 生産地から輸出港までのコーヒー豆の輸送であった。当初, コーヒーはパライバ・ド・スル河流域の生産地からリオ・デ・ジャネイロ港に運ばれたが, 19世紀後半はサン・パウロ県西部が主要な生産地となり, 同地からもっとも近い主要な港であるサントスへ輸送され, 海外に輸出された。大量のコーヒーを搬出するサントスはブラジルコーヒーの代名詞にもなった。サン・パウロ西部には開拓可能な広大な土地が広がっていた。テラ・ロッシャ(赤紫の土)と呼ばれる土壌も生産性がすこぶる高く, コーヒー・プランテーションの創設を後押しした。

1854年, リオ・デ・ジャネイロ県内の高地とグアナバラ湾を結ぶ14.5キロメートルのブラジルの最初の鉄道が開通して以来¹⁰⁾, コーヒーの輸送は鉄道が主役となった。1855年に着工された「ドン・ペドロ2世鉄道」は, リオ・デ・ジャネイロからパライバ・ド・スル河に沿って西進し, サン・パウロ県のカショエイラに至った。

19世紀後半, サン・パウロ西部がコーヒー生産の一大拠点になり, 表6のとおり, 貿易収支が改善すると, 同地では鉄道を中心とした大規模なインフラ整備が行われるようになった。当時, ブラジル政府による資金の調達も, 多くの場合, ロンドンにおいて, 国債の形で行われ, その額は, 表7のように1860年以後急増した。その資金は公共事業, 中でもその多くが鉄道建設に用

いられたが、直接投資されることも多かった¹¹⁾。

サン・パウロ西部とサントス港の間には、急峻な海岸山脈が横たわっており、コーヒーを輸送する際に大きな障害となっていた。この間の鉄道の敷設には、イギリスの資本と技術が大きく貢献した。サントスとジュンディアイを結ぶ「サン・パウロ鉄道」の事業の認可はブラジル人に対して行われたが¹²⁾、1867年の完成時には、同鉄道はイギリスの会社に委譲されていた。「サン・パウロ鉄道」はサントス港への幹線を独占し、これ以上の路線の延長は行おうとはしなかった¹³⁾。その後、サン・パウロ県の統領ジョアキン・サルダニャ・マリニョが発端となったブラジル資本による「パウリスタ鉄道会社」が、1872年にジュンディアイからカンピナスへの路線を開設した。その後もサン・パウロ県内陸部に路線を延ばしていき、「モジアナ鉄道」、「ソロカバナ鉄道」、「イトゥアナ鉄道」などと連結し、サン・パウロの主要なコーヒー生産地を結ぶ鉄道網が整備されていった。

サン・パウロ内の鉄道の総延長は1870年にはわずか139キロメートルであったのが、1875年には約8.7倍の1,212キロメートルになり、1890年には2,425キロメートル、1900年には3,373キロメートルにもなった¹⁴⁾。鉄道網の整備により、表1のように、コーヒーの輸出は飛躍的に増加した。サン・パウロ内の鉄道の多くは直接イギリスの企業が所有するものではなかったが、大半の鉄道会社がイギリスから融資を受けていた。鉄道にとどまらず、コーヒーの輸出に伴う売買、海運、保険、銀行などの活動にイギリス資本が大量に投下されており、イギリスはその利益の多くに与ることとなった。

2-4 ブラジルコーヒーの輸出の増加とコーヒーの普及

18世紀になって、オランダやフランス、イギリスがコーヒーの苗木を入手し、その植民地で栽培する以前、コーヒーはオスマン・トルコがその販売を独占する非常に高価な輸入品であった。ヨーロッパ列強の熱帯の植民地でのコーヒー生産は、主として奴隷によるプランテーションによって行われ、産業革命によって豊かになったヨーロッパ社会で、コーヒーは次第に愛飲されるようになった。

1773年のボストン茶会事件を経てイギリスから独立した合衆国において、コーヒーは、紅茶を愛好するイギリスからの独立を象徴する嗜好品としてさらに好まれるようになり、コーヒーは普及していった。1790年代、合衆国は主としてバタヴィアやパタンでコーヒーを調達・輸入したことから、コーヒーはしばしば「ジャワ」と呼ばれた¹⁵⁾。南北戦争中、多くの兵士たちは、「乾パンとコーヒーの夕食をとり、…真夜中に進軍の命令が出たとしても、奇襲のためでない限りは必ず出発前にポット一杯のコーヒーを沸かす。食事中にも食事の合間にもコーヒーを飲んだ」¹⁶⁾。このような経験がコーヒーの飲用の習慣を普及させた。南北戦争末期、業務用のコーヒー焙煎器が発明されると、合衆国中に焙煎器が普及し、コーヒーがより身近に簡便に飲用できるようになり、コーヒーは大きな産業になっていった。合衆国は、中央アメリカと南アメリカの国々が生産するコーヒーの大半を消費するようになった。「ブラジルは単に世界の需要に応じた

だけでなく…北アメリカやヨーロッパの労働者階級にとって手ごろな値段のコーヒーを大量に生産することによって、需要を作り出すことに貢献したのである」¹⁷⁾。

2-5 奴隷貿易の終結

1500年のポルトガル人のブラジル「発見」以来、ブラジルにおいては労働力の確保が常にその重要課題であった。発見直後のパウ・ブラジル¹⁸⁾の伐採の後、16世紀後半からブラジル北東部において砂糖の生産が本格化すると、労働力は太平洋を越えて導入されたアフリカ人が中心となり、アフリカ人奴隷制を基盤としたプランテーションがブラジル経済の中心となった。その後、主要な経済活動はミナス・ジェライスでの金・ダイヤモンド採掘、コーヒー、タバコ、綿花の栽培などへ変遷したが、大量の奴隷を労役させるその構造は変化しなかった。

表8 1451年から1870年の地域別・年代別奴隷移入数（単位：1,000人）

奴隷移入地域\年	1451～1600	1601～1700	1701～1810	1811～1870	計
スペイン領地域	75.0	292.5	578.6	606.0	1,552.1
ブラジル	50.0	560.0	1,891.4	1,145.4	3,646.8
英領カリブ海諸島	—	263.7	1,401.3	—	1,665.0
仏領カリブ海諸島	—	155.8	1,348.4	96.0	1,600.2
他のカリブ海諸島	—	3.3	484.0	—	487.3
英領北米・合衆国	—	—	348.0	51.0	399.0
合計	125.0	1275.3	6,051.7	1,898.4	9350.4

出所 細野昭雄『ラテン・アメリカの経済』（東京大学出版会、1983年）23頁。

ポルトガルは15世紀半ばよりヨーロッパ向けにアフリカ人奴隷の貿易を行っていたが、表8のとおり、16世紀の半ば以後、ブラジル向けの奴隷の輸出が非常に活発になり、18世紀にそのピークを迎えた。アフリカからブラジルへの奴隷の輸送は、ポルトガルにとって継続的な事業であり¹⁹⁾、そのような奴隷が生み出す大量で廉価な熱帯産品は主としてヨーロッパに輸出され、大きな収益を上げることになり、ヨーロッパとアフリカとブラジルの間の循環が成立した。

1807年に奴隷貿易廃止法を成立し、ウィーン会議において参加各国に奴隷貿易の終結を認めさせたイギリスは、ブラジル政府に対し、奴隷貿易の終結を強く迫った²⁰⁾。その結果、1826年、イギリスは批准して3年後に奴隷貿易を全面的に禁止する条約をブラジルに締結させた²¹⁾。一方、18世紀末に端緒につき、19世紀に入ると本格化したブラジルのコーヒー生産は、奴隷労働に依拠しており、奴隷制は引き続きブラジル社会の基盤であり続け、奴隷の輸入は駆け込み需要に応じるかのように増加した。1811年からの10年間の奴隷が輸入された数は、年平均3万2700人、1821年から10年間では年平均4万3,100人の奴隷が輸入された²²⁾。1831年、ブラジル議会も、奴隷貿易商に厳罰を科し、それ以後に導入された奴隷を解放する法律を定めたが、コーヒーという巨大な利益を生み出す産品の興隆とその基盤となる労働力の需要から、このような規則はなし

崩しとなり、半ば公然と奴隷の輸入が続けられた²³⁾。一方、イギリス議会は、1839年、イギリス海軍に対し奴隷貿易船の拿捕を許可する「パーマーストン法」を可決し対抗した。そして奴隷貿易禁止条約の失効（1846年）を前に、その延長を認めようとしないブラジル政府に対し、1845年、イギリス議会は奴隷貿易船の拿捕と関係者の処罰ができる権限をイギリス海軍に付与した²⁴⁾。そして1850年、ブラジル議会は、奴隷貿易の廃止の実行を強制する法律を定め、ようやく奴隷貿易が終息した²⁵⁾。

3. サン・パウロのイタリア人移民

3-1 農村部のイタリア人移民

3-1-1 コーヒー生産における労働力不足とイタリア人移民の導入

奴隷貿易の終結前の大量の奴隷の輸入は、増大するコーヒー生産の労働力の需要を、しばらくの間、満たすことができた。また、北東部で主としてサトウキビ栽培に従事していた奴隷も労働力としてコーヒー農場へ移入された。しかしながらその後も増え続けるコーヒー栽培における労働力の需要の高まりと奴隷の供給不足²⁶⁾は、奴隷価格の高騰を引き起こすようになり、それまでブラジルの社会・経済を支えてきた奴隷制に疑義を生じさせた。パラグアイ戦争（1864 - 1870年）に従軍した多くの奴隷が自由を獲得するようになると、奴隷制廃止の機運はますます高まり、段階的に奴隷は解放された²⁷⁾。代替の労働力として想定されたのは、それまで南部を中心に入植し、ある程度の成果を挙げていたヨーロッパ移民であった²⁸⁾。サン・パウロでのコーヒー生産の拡大と奴隷貿易の終息に向けての動きはおおよそ時期が重なっており、サン・パウロの農園主にとって、いずれ奴隷制に依拠できなくなることは明白であった。

公有の未開拓地（セズマリアと呼ばれた）の無償譲渡と家族単位の小土地所有制に基づいて行われていたヨーロッパ人入植者の導入は、19世紀後半、奴隷制の衰微により変化を余儀なくされた。サン・パウロの農場主は、それまで帝国政府によって推進された入植地の開設には関心がなく、自身の農場で働く安価な労働力を求めていた。移民による奴隷労働力の代替が議論的になり、あいまいであった土地所有に関する法整備が行われると同時に、売買以外での公有地の譲渡が禁じられ²⁹⁾、外国人農業雇用労働者導入に向けて環境が整えられた。

サン・パウロにおけるコーヒー生産は、パライバ・ド・スル河流域からミナス・ジェライス県との県境を囲むようにして北上し、19世紀半ばにはカンピーナスに達した。その後、西進し、19世紀末にはアララクァラおよびジャボティカバルのあたりに至った。1920年には大西洋と並行するようにサン・パウロ県の内陸部を覆っていき、鉄道網の整備とともに1935年にはサン・パウロ県西端に達した³⁰⁾。生産地が拡大するにしたがってますます高まっていった労働力の需要について、1880年代になると、サン・パウロ県の新興のコーヒー・ブルジョアジーは、5年間の契約履行を条件に、移民の渡航費の負担を行うようになった。彼らは、県ならびに帝国政府に対し、ヨーロッパ人の移住労働者の導入に向けてますます圧力を強めていった³¹⁾。1883年には首都リオ・デ・ジャネイロに移民中央協会が結成され、「移民」と題された機関紙を毎月発行し、

ブラジル国内外にブラジルへの移民の意義を喧伝した³²⁾。1886年にはコーヒー農園主でありサン・パウロの有力者でもあった者たち³³⁾のイニシアチブで移民促進協会が設立され、移民農業雇用労働者の募集が本格化した。1888年には奴隷制が廃止され、1889年11月15日、君主制が崩壊し共和制が宣言された。共和制移行を機に、ブラジルに居住中のすべての外国人および2年間居住した外国人をブラジル人とみなすことを規定し、1891年憲法では、6ヶ月以内に異議を申し立てない限り、ブラジルに居住するすべての外国人の即座の国籍付与を保証した³⁴⁾。

それまで外国人移民の導入のイニシアチブは、国、州(県)³⁵⁾、民間によりそれぞれ行われてきたが、共和国が連邦主義を採用したことで、州の裁量が大きく影響するようになり、それぞれの州が状況に応じて移住者導入の業務を行うこととなった³⁶⁾。しかしながらこの制度の移行により恩恵を受けたのは、コーヒー生産を背景にした豊富な財力を有するサン・パウロ州のみであった。サン・パウロ州は労働力の逼迫から、ますます積極的に移住者導入に向けて活動するようになった³⁷⁾。州政府は移民促進協会を通じ、国内外で移民の募集活動を行った。国内ではすでに移住している外国人移民に対し、ポルトガル語、ドイツ語、イタリア語によるパンフレットを作成し、親類や知人の呼び寄せを促した。海外での募集活動は、それまで行われていた外国人入国者を募集する方法を継承した。募集が行われたのは、余剰労働力にあふれ貧困がはびこっていたイタリアが主であり、募集は仲介者を通じて行われた³⁸⁾。ブラジルへの年別イタリア人入国者数(表9)のとおり、1875年を境にその数は急増し、1884年まで年間1万人を超えるようになった。移民促進協会は、イタリアのジェノヴァに出張所を設け、州の全面的な援助を背景に、当初はイタリア北部、その後はイタリア全土で積極的に募集活動を行った³⁹⁾。ブラジルへのイタリア人入国者は、移民促進協会が活動を開始した1886年以後、年によって多寡はあるものの、大幅に増加し、1891年には、もっとも多い13万2,316人を数えた。移民促進協会は1895年に幕を閉じたが、表10のとおり、同協会の活動期には移民の数が大幅に増加した。サン・パウロに限定すれば、同協会の活動期である1886年からの10年間で48万896人の移民が入国し、うち35万3,139人がイタリア人であり、全体の73.4パーセントを占めた⁴⁰⁾。同時期のブラジルへの移住者総数(105万383人)に占めるイタリア人移民の割合(総数61万482人で58.1パーセント)と比べると、サン・パウロでどれほどイタリア人に対する依存度が高かったかがわかる。

表9 年別イタリア人入国者数

年	人数	年	人数	年	人数
1836	180	1894	34,872	1926	11,977
1848	5	1895	97,344	1927	12,487
1853	22	1896	96,505	1928	5,493
1862	431	1897	104,510	1929	5,288
1864	2,092	1898	49,086	1930	4,253
1865	500	1899	30,846	1931	2,914
1868	841	1900	19,671	1932	2,155
1869	1,052	1901	59,869	1933	1,920
1870	7	1902	32,111	1934	2,507
1871	1,626	1903	12,970	1935	2,127
1872	1,808	1904	12,857	1936	462
1873	- *	1905	17,360	1937	2,946
1874	5	1906	20,777	1938	1,882
1875	1,171	1907	18,238	1939	1,004
1876	6,820	1908	13,873	1940	414
1877	13,582	1909	13,668	1941	89
1878	11,836	1910	14,163	1942	3
1879	10,245	1911	22,914	1943	1
1880	12,936	1912	31,785	1944	3
1881	2,705	1913	30,886	1945	180
1882	12,428	1914	15,542	1946	1,059
1883	15,724	1915	5,579	1947	3,284
1884	10,572	1916	5,340	1948	4,437
1885	21,765	1917	5,478	1949	6,352
1886	20,430	1918	1,050	1950	7,342
1887	40,157	1919	5,231	1951	8,285
1888	104,353	1920	10,005	1952	15,207
1889	36,124	1921	10,779	1953	15,543
1890	31,275	1922	11,277	1954	13,408
1891	132,316	1923	15,839	1955	8,945
1892	55,049	1924	13,844	1956	6,069
1893	58,552	1925	9,846		

注 *実数は不明。

出所) 佐藤常蔵『ブラジルの移民史』帝国書院, 1964年, 152頁。

表 10 年代別ブラジル入移民総数とイタリア人移民の割合

年代	移民総数	イタリア人移民 (全体に対する%)
1881-1885	163,805	76,060 (46.4)
1886-1890	391,636	232,339 (59.3)
1891-1895	658,747	378,143 (57.4)
1896-1900	470,568	300,618 (63.9)
1901-1905	279,723	135,107 (48.3)
1906-1910	391,628	80,719 (20.6)
1911-1915	611,360	106,906 (17.5)

出所) 北村暁夫「ヴェネトからブラジルへ」山田史郎ほか『移民』ミネルヴァ書房 1998年, 37頁。

3-1-2 コーヒー農場での労働

サン・パウロにおいて行われた移民の導入は、主としてコーヒー農場での雇用労働力を求めるものであり、それまで南部を中心に行われていた未開発地を分譲するという形態とは異なっていた。南部でのヨーロッパ人移民の入植には曲折があったものの、ある程度の規模でヨーロッパ人を引き寄せ続けることができたのは、大西洋を渡るという危険を冒しながらも「土地を所有し農業で成功する」という見通しがあったからであった。この傾向はイタリア北部、とくにヴェネトから向かう家族移民に顕著であった。移民促進協会は、主たる仲介者であったカエタノ・ピントに「上陸港から目的地までの旅費の全額負担、種苗、6ヶ月以上の間の食事の支給を約束し、土地所有者になる可能性も保証する」⁴¹⁾ ことを募集チラシに記載することを許可し、移民を募った。1890年までの時期は、ヴェネト出身者が優勢であり、彼らは、2、3人の男とその妻、その子孫からなる12から15人の大家族で移住した⁴²⁾。1890年以後の家族移民は規模が小さくなり、財産を持たない単身男性が、渡航費無料の機会を利用してサン・パウロに赴いた。このような単身男性はイタリア南部、とくにカラブリア出身者が多かった⁴³⁾。

サン・パウロにおける新たな労働力の需要は、主としてコーヒー栽培の拡大に伴い生じたため、移民労働者は、新たな農場の開設や拡張にあてがわれることも多かった。その第一歩は、原生林の樹木を伐採である。伐採された樹木は乾燥された後に焼却される。これらの作業は重労働で危険が伴ったことから知識や経験を必要とした。家族を持たない単身のイタリア人移民の男性の多くは、このような作業を好み、ブラジル人の先達の下働きから始めて経験を積んでいった。

一方、土地が切り開かれると、次にコーヒーの苗木が植えられた。植え付けから収穫可能になるまでの4年間、これらの若木を管理する業務は「請負」と呼ばれた。除草や樹木の保護・育成の間に、トウモロコシや豆などの作物も栽培できたため自給自足が可能であるほか、余剰作物を販売することもできたことから、契約期間の終わりにまとまった資金を蓄えることができた。その資金によって土地購入も可能であったため、数年間の農業雇用労働を経験した移民の多くが「請負」の契約を求めた。

コーヒーの木が成長し、コーヒー豆の生産が可能になると、管理はコロノと呼ばれる契約労働者に任された。契約労働者は、農場内に居住し、男性が約2,500本、成人女性や未成年の男性は1,000本のコーヒーの木を受け持った⁴⁴⁾。彼らは、年間数回の除草と収穫など、農場主に求められた作業を行う以外に、自給用の穀類を栽培したり、豚、ヤギ、鶏、牛などの家畜を育てたりした。これらの作業はたいてい家族単位で行われ、子どもも女性も重要な労働力であった⁴⁵⁾。働き手が増えれば増えるほど、家族全体の所得が増えることから、移民の一家は一般に多産であった。また農場主も子どもや女性も貴重な労働力とみなしており、家族との契約を好んだ。また、単身者の場合は、必要に応じて雇用されるカマラダと呼ばれる臨時雇いとして働くことが多かった。臨時雇いは、コーヒー豆の収穫や加工などの下働きを行った。コーヒー豆の加工は、農場内で行われ、当初はイタリア人の未成年の女性が従事したが、その後、皮むきや選別は機械化された。

3-1-3 自作農への移行

1880年代から1890年代にかけて、サン・パウロのコーヒー農場に雇用労働者として就労したイタリア北部出身者は、資金が貯まると土地を購入し、自作農へと移行した。土地の購入は、家族の規模が大きく影響した。就労可能な家族が多ければ多いほど所得が増え、小土地所有者になることができた。彼らの多くは、前記の苗木の育成の「請負」を経て独立した。一方、1890年以後にサン・パウロにやってきた小家族の場合、土地の購入は非常に困難であった。

彼らが購入した土地は、当時、サン・パウロを西進していたコーヒー栽培地の前線付近の土地が多かった。サン・パウロの北西から南東にティエテ河が流れており、その右岸部に沿って、州都から90キロメートルほど北のカンピナスから北西に向かってアララクァラ、ジャウ、イタポリスなど中西部に至る一帯に集中した。彼らが購入したのは、コーヒー栽培ですでに疲弊していた旧コーヒー農場の一角や、未開拓ではあっても交通の便が悪く消費市場まで商品を運ぶのが困難な土地が多かった。サン・パウロ州内の土地所有に関する1905年と1920年の調査によると、1905年において、所有地の総数5万6,931の中でイタリア人所有地の数は5,197であるのに対し、1920年においては、総数8万921中、イタリア人所有地は1万1,815となっている⁴⁶⁾。1905年の時点でイタリア人所有地の割合は州全体の9.1パーセント、1920年には所有地の数は倍増し、全体の14.6パーセントを占めるに至った。1920年の調査によれば、国内全体でのイタリア人の所有地は3万5,894を数え、他の国籍者を押さえ首位を占めているが、評価額ベースでは19位、面積においてはさらに低く21位になっている。

このようにイタリア人が所有する土地は、総じて、小さく、地価も安いものであったが、年を経るごとにイタリア人の土地所有者は増えていった。その割合はサン・パウロに在居のイタリア人の約15パーセントを数えた。サン・パウロ農村部で決して恵まれた状況にはなかったが、サン・パウロ全体が発展していく中で、彼らの住んでいる地域の重要性も増していき、イタリア人とその子孫はそれらの土地で重要な地位を占めるようになっていった。

3-1-4 農場主との軋轢

イタリア人移民は、白人であることと、ブラジルの基盤であるラテン的な文化とカトリック信仰を共有していること、ならびに言語の類似性から、ブラジル社会や文化への順応に大きな問題が生じることはなかった。しかしながら奴隷労働から自由労働への移行期にやってきたため、農場主やその管理者は自由労働者の扱いに慣れておらず、しばしばイタリア人雇用労働者との間で軋轢が生まれた。農場は一般に孤立していたことから、生活全体が農場で完結するようになっていた。必要物資の売買も農場内で行われたが、奴隷制においては農場内で金銭が介在することがほとんどなかったことから、奴隷制廃止後も金銭のやり取りをする習慣がなく、売買の代金は労働者の給金から差し引かれることになった。しかしながら、その価格が売り手である農場主の言い値であることと、分量のごまかしなども頻繁にあったことから、給金から差し引かれる額は大きかった。その結果、移民の雇用労働者が受け取る額は見る見る減っていき、時には負債を抱えることにもなった⁴⁷⁾。加えて農場主は、しばしば用心棒などの暴力を用いて、移民労働者たちを自身の絶対的な権力下に置こうとした。通信や移動、外出は農場主の許可を要し、余暇の活動まで制限された⁴⁸⁾。

拡大するコーヒー生産に対して、世界市場は1870年代にはすでに供給過多の兆候⁴⁹⁾を示していたものの、市場の拡大を背景に、大きな利益を生む唯一の商品作物であるコーヒーをブラジルは輸出し続けることで不況を乗り越えようとした。1889年の共和制移行後、国内的には銀行信用の拡大により資金の調達が可能になったことや通貨安を、国際的には価格下落によるコーヒー消費のさらなる拡大を背景に、サン・パウロでは農場が新たに創設され続けた。一時的な好況があったが、その反動も大きく、コーヒー産業の不況は、農場の移民労働者たちの生活を直撃した。農場主からの給与の支払いが滞ると、農場主の専横に耐えてきた移民たちの不満が爆発し、時には母国ですでに萌芽していた階級闘争をサン・パウロの農場に持ち込んだ。1902年、このようなイタリア人移民農場労働者の不満がイタリアに伝わるようになると、イタリア政府は補助金によるブラジル渡航を禁止し、その後、ブラジルに渡るイタリア人の数は大幅に減少した⁵⁰⁾。

共和制初期に大量に植え付けられたコーヒーの木は、4、5年後から収穫が可能になり、1903年以後、ブラジルは大量のコーヒーの滞貨を抱えることになり、コーヒーの市場価格が下落した。ブラジル政府は、1906年、市場介入によってコーヒーの価格を維持しようとした⁵¹⁾。コーヒーの過剰生産を背景にした不況は継続し、サン・パウロの農村部での農場主と移民労働者との軋轢はとくに1910年以後、激化した。リベイラン・プレトでは、1913年、農園内で労働者が列状に植えられたコーヒーの木の間で自給するための作物を栽培することを農場主が禁じたことに反発し、二つの農場の労働者が、賃上げと自給用の作物の栽培の許可を求めて、ストライキを起こした。この運動は近隣の農場を巻き込み、総勢1万人から1万5,000人の労働者が参加し、コーヒーの収穫を拒否した。このストライキにはイタリア領事も乗り出し、政府も介入し、政治的な解決が図られた⁵²⁾。ストライキは成功しなかったが、労働運動の影響力を世間に知らしめることになった。それ以後、ストライキは重要な労使交渉の手段となり、農場主と移民労働者との関

係に変化を生み出した。

3-2 都市部におけるイタリア人移民

イタリアからの移民には2類型が見られる。ヴェネトを中心とした北部出身者は、母国で農業に従事し、新天地で土地所有者になることを念頭にした大家族による移民であり、一方、募集活動が活発となった1890年代以後増加した南部出身者は、母国でも定職を持たない単身者の移民が主であったとされる。1880年代後半以後、大量の移民を受け入れたサン・パウロに限って言えば、移民の多くが渡航費の支給を受けた移民であり⁵³⁾、家族でやってきた者も、単身の者も、農場雇用労働者になった者は、同じように給金の遅滞、未払い、負債、精神的および肉体的拘束や暴力といった農場主および管理者との間の軋轢に苦しんだ。契約を満了し、土地所有者になる者もいたが、他の農場に移ったり、アルゼンチンに再移住したり、母国へ帰った者も多かった。忍従の限界を超えたとき、彼らが行う手っ取り早い手段は、農場からの逃亡であった。契約を違反したり、負債を踏み倒したりする形で逃亡する労働者に対し、農場主は追っ手を差し向け、捕まれば厳しく罰した。家族や縁者に対し累が及ぶこともあった。

農場の臨時雇いで働いた者で、サン・パウロの農村部での仕事に見切りをつけた者の多くは、コーヒー景気を背景に発展を続けていたサン・パウロの州都に向かっていた。農場を逃亡した移民も、その多くがサン・パウロの都市部に向かった。また、当初から農村部ではなく都市部に定着したイタリア人も30パーセントほどいたとされる⁵⁴⁾。1886年のサン・パウロ市の人口は4万7,697人で、外国人移民の数は1万1,939人、イタリア人はおよそその半分の47.3パーセントを占めた。1893年には同市の総人口は13万775人に急増し、外国人はその54.7パーセントの7万1,568人、イタリア人は4万5,457人で外国人市民の63.5パーセント、総人口の34.8パーセントをも占めた。1900年の同市の総人口は1886年の約5倍の23万9,820人まで上昇し、イタリア人は約7万5,000人で、全体の31パーセント、1886年の約13倍に急増した⁵⁵⁾。1920年には同市の人口は57万9,033人に膨れ上がり、その4分の1が外国人でありその40パーセントがイタリア人だったとされる⁵⁶⁾。

3-2-1 プロレタリアート

サン・パウロ市に向かったイタリア人の多くは、緒に就いたばかりの同市の工業化を、労働者として担った。1901年に行われたサン・パウロ市の工業化に関する調査によると、当時、同市で就労していた工業労働者は5万人であり、そのうち90パーセントがイタリア人であった。主たる工業である繊維産業では1912年時点で労働者の60パーセントがイタリア人であり、1913年の土木工事ではその5分の4の労働者がイタリア出身者であった⁵⁷⁾。

彼らの労働条件は劣悪であった。労働時間は長く、賃金は安かった。1920年にサン・パウロの労働者が手にする一日あたりの賃金は約4ミルレイスで、せいぜい500グラムのコメかパスタ、ラード、コーヒー、砂糖が買えるかどうかの額であった⁵⁸⁾。女性や子どもの労働も、労使双方に

とって非常に重要であった。使用者にとっては成人男性よりも安価に用いることができる便利な労働力であり、家族にとっては少しでも貯金を増やすための重要な稼ぎ手であった。繊維産業における女性の重要性は際立っており、1912年の調査では、女性の工員の割合は67パーセントを占めた。加えて16歳以下の子どもの割合が8.2パーセントあった。工業のプロレタリアート全体でも、1920年の調査で、女性と子どもの割合は43.1パーセントを占めた⁵⁹⁾。

非常に脆弱な生活基盤の中で生活するイタリア人移民たちは、度重なる物価上昇や条件の悪化に立ち行かなくなると、組織化し、ストライキを行った。彼らは給与ならびに労働条件の適正化を目指し、8時間労働、罰金の廃止、女性と児童の労働基準の策定、週休制、給与の支払期日の遵守を要求した。ストライキにはイタリア人女性の参加も顕著であった⁶⁰⁾。1906年にはパウリスト鉄道会社の鉄道員であったイタリア人マヌエル・ビザニが主導したストライキはサン・パウロ州の奥地に広がり、州内54の事業所で同時ストライキを行うに至った。移民主導で頻発するストライキに対し、1907年、アドルフォ・ゴルド法が制定され、「国家の安全や公共の安寧を脅かす外国人」を国外へ強制退去させることが可能になった。しかしながら、その後もイタリア人工員が関わるストライキが続発した。その結果、ストライキを主導したとして労働運動に関わった多くのイタリア人が追放されるに至った⁶¹⁾。

3-2-2 コミュニティ

サン・パウロ市における工業化は、タマンドゥアティ川やティエテ川の河岸で始まった。洪水の危険があるため地価が安いこのような場所に工場が築かれ、工場を取り囲むように労働者が住み着いた。1894年に市の行政長官により市議会に提出された報告書によれば、これらの労働者の居住地は、「泥に覆われ、屋外で用を足すような地区であり、悪臭を発生し、水道も電気も排水も衛生もなく、6人から10人が一部屋に押し込められるためプライバシーもない」場所であった⁶²⁾。プロレタリアートのほとんどがこのような場所に住むことを余儀なくされ、その多くをイタリア人が占めていたため、結果的にこれらの地域はイタリア人居住区の様相を呈すようになった。現在イタリア人街として名高いモオカ、プラス、ボン・レティロ、ビシガのような町はこのようにして出来上がった。

これらのイタリア人街にはイタリアのさまざまな地方の出身者が集った。カンバーニアやカラブリアのような南部出身者が多かったが、イタリアからブラジルに渡った移民の出身地はイタリア全土に及んでおり、サン・パウロの農村部から州都に流入したイタリア人移民の多くは、出身地による大まかな住み分けはあったものの、これらの町に混住した。イタリアの南北格差は現在でも知られるところであるが、同じ南部や北部でも地域によって帰属意識は異なっており、1860年の国家形成後も、文化、言語、意識、民族において、「イタリア性」を一義的に設定することは不可能であった⁶³⁾。サン・パウロでも同郷人のサークルが再編成され、それぞれの方言が話され、それぞれの守護聖人の祝う祭りが行われた。しかしながら、時の経過とともに、すべての地方の出身者を包含する「イタリア人」としてのコミュニティ化が進行した。彼らは日常的に接触

を続け、ホスト社会の中で、「イタリア人」として一様に扱われた。同じような恵まれない境遇に置かれて協調していく中で、彼ら自身の中で地域的な差異を重視することが少なくなり、「イタリア人」としての意識が涵養されていった。

また言語においても共通語が用いられるようになった。20世紀初頭にサン・パウロに滞在したイタリア人旅行者ジナ・ロンブローゾ・フェレロは「サン・パウロではトリノやミラノ、ナポリよりも多くのイタリア語が話されているのを耳にする。というのも我々の間では方言が話されているが、サン・パウロでは大多数がヴェネト出身者とトスカーナ出身者の影響下で多くの方言が融合しているからである」と述べている⁶⁴⁾。このようなイタリア人移民のコミュニティ化には現地のイタリア語による新聞も寄与した。イタリア語の新聞では、1879年にサン・パウロで発行された「ラ・ジウスティツィア（正義）」を皮切りに、多くのイタリア語による新聞が発行された。その後、1920年代までにサン・パウロ市では127紙が発行され、うち60が外国語、中でも55がイタリア語の新聞であった⁶⁵⁾。これらの新聞の多くは労働組合のスポークスマンの機能を果たしていたが、同時に、彼らの共通語である「イタリア語」に確固たる地位を与え、イタリア半島の出身者に対しコミュニティの意識を高める働きもした。

3-2-3 社会的地位の上昇

イタリア人のサン・パウロへの集中はサン・パウロ市の発展とほぼ軌を一にしていた。コーヒー・ブルジョアジーが闊歩する中で、イタリア人移民は社会の底辺に集中していたが、サン・パウロ市の都市化が進むにつれて生じたスペースに、イタリア人は巧みに入り込み、自分たちの居場所を作っていた。イタリア語の看板を出して同国人のみを相手にする場合もあったが、中・上流のブラジル人が居住する地区に出張ってイタリア語訛りのポルトガル語を使って商売することもあった。新聞売り、靴磨き、市電の運転手、レストランや軽食堂のウエーター、空き瓶などの回収業、野菜や果物や魚や穀物、燃料などの行商を行った。鋳物や時計、靴、鞆の修理、調髪や洋服の仕立てや写真の撮影などを行う者も現れた。資本を蓄え商店を構える者も現れた。1902年から1910年の8年間に、サン・パウロ市内でイタリア人の所有する不動産は1.5倍に増加した⁶⁶⁾。とくに第三次産業はイタリア人以外にほとんど競争相手がおらず、独壇場だったと言える。ノウハウを蓄積し、ネットワークを生かし、事業を拡張していった⁶⁷⁾。1920年の調査によればサン・パウロの各種商業の2万8,628の事業所のうち、外国人の所有する事業所は1万8,215であり、その割合は6割を超えていた⁶⁸⁾。

工業分野でも頭角を現すのに時間はかからなかった。家族経営の工場から出発し、同国人を積極的に雇用し、利潤を投資に回して規模を拡大していった。イタリア人の企業は、当初は織物業、食品業、家具などの製造業が主であった。その数は、1901年に36社であったのに対し、1920年には1,446社に急増した。イタリア系の企業の割合は1901年で全体の25.2パーセント、1920年には48.7パーセントに至っている⁶⁹⁾。ブラジルを代表する財閥マタラッツォもイタリア系であり、カンパーニアの小村の出身の初代⁷⁰⁾が、当時イギリスからの輸入品であり高価であったラード

に目をつけ、ブラジルに安価で供給し、大成功を収めたのがその発端であった。

現在、サン・パウロ人の子孫は、ありとあらゆる分野で活躍している。実業界にとどまらず、通信、自由業、アカデミズム、ジャーナリズムから芸術、映画、スポーツの分野に至るまで。サン・パウロでもっとも人気があるサッカーチームであるコリンチャンスCorinthiansの創設もイタリア人の手によるものであった。

4. ま と め

19世紀に興隆したブラジルのコーヒー栽培は、当初、奴隷の労働力に依拠したりオ・デ・ジャネイロがその中心地であった。1830年以後、コーヒーはブラジルにとってもっとも重要な輸出商品となった。当時のブラジルはイギリスの強い影響力の下にあり、コーヒーの海外への売買、海運、保険、銀行など、輸出に関するあらゆる分野で、イギリスの資本が投下された。

処女地を開発し土地が疲弊すれば移動するというその原始的な農法は、常に新たな土地を必要とし、栽培地は西進し、19世紀半ばにサン・パウロに至った。サン・パウロはコーヒー栽培に適した土壌を有していたが、生産地から輸出港への製品の輸送に問題があり、主としてイギリス資本による鉄道網が整備された。19世紀後半以後はサン・パウロ西部が主要な生産拠点となった。

1850年には奴隷貿易が終結し、奴隷の労働力は次第に縮小していく中、新たに開発されたサン・パウロのコーヒー・プランテーションでは、労働力としての奴隷を当てにすることはできなかった。そこで新たな労働力として想定されたのは、当時、ブラジル南部への入植で実績のあったイタリア人移民であった。イタリア人の主たる海外の移住先には、ブラジル以外に米国、アルゼンチンがあり、ブラジルは「渡航費無料」を謳い文句に多くのイタリア人移民を導入した。

これらのイタリア人移民はサン・パウロのコーヒー農場へ配置された。コーヒー農園でイタリア人は主としてコロノと呼ばれる雇用労働者として就業した。家族で資金を貯金し、独立して小土地所有者へ移行した者もいたが、奴隷と変わらぬ扱いに耐えかね脱走するものも多かった。農場ではストライキが続発し、1902年にイタリア政府は、渡航費の補助を受けた自国民のブラジル移住を禁じた。

サン・パウロの都市部には、主として単身でブラジルに渡ったイタリア南部出身者が多かった。また、農場を脱走した者の多くも都市部に向かった。サン・パウロ市では、大量移民開始後、外国人の人口が増加し、その多くがイタリア人であった。急激な都市化が見られたが、イタリア人の重要性は変わらなかった。イタリア人はサン・パウロの工業化が始まった当初からプロレタリアートの大半を占め、労働運動を先導した。

河岸にある工場周辺の地価の安い地域には、イタリア人が集まり、彼らは同じ出身地の出身者のコミュニティを作った。当初は出身地による分離が見られたが、ブラジル社会の中で共闘し生活していく中で、それぞれの差異が意味をなさなくなり、イタリア人としてのアイデンティティが生まれるようになった。

イタリア人は都市のサービス業にも当初から進出した。競争相手もおらず、貯金ができると商店を構えた。工業分野で起業する者も現れた。中にはブラジルを代表する企業家になる者もいた。イタリア人とその子孫は、サン・パウロのあらゆる分野でその存在感を示している。サン・パウロのポルトガル語はイタリア人の話すイタリア訛りのポルトガル語の影響を受けているとも言われる。宗教から料理などの生活習慣に至るまで、サン・パウロにおけるイタリアの影響は非常に大きい。

注

- 1) ブラジルへのコーヒーの木の伝播の発端については諸説あるが、もっとも流布している説は以下のとおり。「1727年、曹長フランシスコ・デ・メロ・パリエタが公務でカイエンヌ（仏領ギアナの首都：筆者注）に行った際、いくつかのコーヒーの種と小さな5本の苗を持って帰ってきた。それらはパラ州のベレンに植えられ、首尾よく成長した。翌年、マラニャン州でもその植付けが始まった。栽培は国内に広がっていき、1770年にはバイアに達した。新たな耕作が広がるには時間がかからなかった。」Lazzarini, Walter, “A Cafeicultura Brasileira”, Instituto Brasileiro do Café Departamento Econômico Programa de Formação de Pessoal, *Curso de Economia Cafeeira tomo I*, Rio de Janeiro, Figliati Artes Gráficas, 1962, p. 171. パリエタは、フランスとオランダの植民地の領土問題の解決のために同地に赴いたとされ、パリエタの種の入手には伝説めいたロマンスの逸話も伝えられている（マーク・ペンダーグラスト（樋口幸子訳）『コーヒーの歴史』河出書房新社、2002年、45頁）。
- 2) ボリス・ファウスト（鈴木茂訳）『ブラジル史』明石書店、2008年、148頁。リオ・デ・ジャネイロへの伝播の時期には諸説ある。
- 3) ペンダーグラスト、前掲書、52頁。
- 4) パライバ・ド・スル河は、サン・パウロ州南部に水源を持ち、海岸線とはほぼ平行にリオ・デ・ジャネイロ州に向かって流れている。ミナス・ジェライス州との州境をかすめ、リオ・デ・ジャネイロ州北部で大西洋に注いでいる。
- 5) 「この「サントス・コーヒー」の輸出は、ブラジルはもちろんのこと、中南米地域全体における「コーヒーの時代」の到来を告げる最初の鐘声となった。」小澤卓也『コーヒーのグローバル・ヒストリー』ミネルヴァ書房、2010年、73頁。
- 6) 富野幹雄「19世紀ブラジルの経済発展とコーヒー生産」『アカデミア』人文・社会科学編第66号、抜刷、南山大学、1997年、13頁。
- 7) 「生態史学者ウォレン・ディーンは、…コーヒーがブラジルの環境に及ぼした破壊的な影響について詳しく述べている。ブラジルの冬である5、6、7月の間に、労働者の大部隊が山の麓の方から仕事に取りかかる。木々の幹を、かろうじて立っていられる程度まで切っていくのである。それからどの木が主木か見極める。つまり、大きな木を一本だけ切り倒すと、その周囲の木々も巻き添えになっていっせいに倒れるという仕掛けだ。…もし正しい木を選べば、その山腹全体がすさまじい轟音とともに崩れ落ち、舞い上がる土埃と、オウムやオオハシや小鳥たちの群れが空を埋め尽くした。切り倒された大木は、数週間乾燥された後、焼かれた。その結果、乾期の終わり頃になると、空には常に黄色い煙の幕が垂れ込め、太陽を覆い隠した」（ペンダーグラスト、前掲書、55-56頁）。「伝統的な「焼き畑」農業…の産業規模版の始まりで、大々的なコーヒーの植え付けが続き、地中の養分はしだいに枯渇していき、土壌の侵食が劇的に進んだ。…小規模の焼き畑農業では、周囲の自然環境がただちにその自然を取り込んでい

き、土地は回復できるようになる。対照的に19世紀のブラジルのコーヒー農民が行っていたような大規模な運用では、広範囲にわたる環境破壊を引き起こすことが避けられなかった」(アントニー・ワイルド〔三角和代訳〕『コーヒーの真実』白揚社、2007年、182頁)。

- 8) 17世紀を通じて、ポルトガルは、フランスとイギリスの鏑競り合いの中で、スペインやオランダに対抗する際のよすがとしてイギリスと同盟した。イギリスの勢力を利用する代償として、イギリスに通商上の特権を認めることになった。「結果として、17世紀後半にはポルトガルはイギリスにブドウ酒を輸出、イギリスはポルトガルやその植民地であるブラジルに工業製品を輸出、ブラジルからはポルトガル経由でイギリスに熱帯産品を輸出するという三角貿易の体制が成立することになった」(富野幹雄「19世紀ブラジルの経済発展とコーヒー生産」『アカデミア』人文・科学編第66号、抜刷、南山大学、1997年、2頁)。このような状況は、1703年、イギリス・ポルトガル両国の間で締結されたメシュエン条約でより明確になった。この条約は、ポルトガルがイギリスの毛織物の輸入を認め、イギリスはポルトガル産のワインをフランス産の3分の1の関税で輸入するという取り決めであったが、実質的にはポルトガルの対英貿易の輸入超過を追認し、大量の貿易赤字はブラジル産の金で支払われることになった。金七紀男『ポルトガル史』彩流社、1996年、134-137頁参照のこと。
- 9) ナポレオン1世が1806年のベルリン勅令、1807年のミラノ勅令で命じた大陸封鎖は、イギリスとの影響の強かったポルトガルにとって大きなジレンマを引き起こした。フランス軍がスペインからポルトガルに侵攻すると、ポルトガル王室は、大量の随行者を伴って、イギリス艦隊の護衛の下、ブラジルへ向かった。1808年1月28日、ブラジルに到着したジョアン6世(当時は摂政)が、友好国へのブラジルの開港を宣言し、ブラジルは事実上、植民地としての地位を脱却した。
- 10) ラテン・アメリカで最初に建設された鉄道。マウア子爵(イリネウ・エヴァンジェリスタ・デ・ソウザ)によって計画される。1835年に建設が決定してから約20年後の1854年4月30日に開通。「マウア鉄道」として知られる。
- 11) 1861年から15年間にブラジルで認可された外国企業の数を見ると、全103社のうち、78社がイギリスの企業であり、全体の約76パーセントを占めた。その後はアメリカ、ドイツ、フランス、ベルギーなどの企業の進出が増えたものの、1876年からの15年では167社のうち99社(約59パーセント)、1891年からの15年では180社のうち80社(約44パーセント)をイギリスの企業が占めた。富野、前掲書、18頁。
- 12) 鉄道建設の許可はマウア子爵、モンテ・アレグレ公爵、ジョゼ・アントニオ・ピメンタ・ブエノに対して行われ、帝国政府とサン・パウロ州政府より合計7パーセントの利子補給の援助を受けた。
- 13) ファウストは次のように述べている。「サンパウロ鉄道は、ジュンディアイからリオクラロ〔サンパウロ市から約160キロメートル内陸の都市〕までの鉄道敷設権を保有していたが、ロンドンでの資本調達に困難であることを理由に、その路線の建設を断念した。おそらく、それは戦略的な判断だったのであろう。」ファウスト、前掲書、162頁。
- 14) Saes, Flávio Azevedo Marques de, *As ferrovias de São Paulo 1870-1940*, São Paulo, Editora Hucitec em convênio com o Instituto Nacional do Livro, Ministério da Educação e Cultura, 1981, p. 24.
- 15) 「…1822年にはオランダ東インド会社が全世界のコーヒー消費量22万5,000トンのうち10万トンを算出していた」(ワイルド、前掲書、108頁)。
- 16) ペンダーグラスト、前掲書、86頁。
- 17) 同書、51頁。
- 18) ブラジルウッド (brazil wood)、ブラジルボクとも訳されるこの木の心材から得られる赤・紫

- の色素であるブラジリンは染料として用いられた。ブラジルの国名もこの樹木に由来する。
- 19) 表8のとおりブラジルの奴隷の移入数は、他地域と比べても突出して多い。このことにより、ポルトガルにとって、アフリカにおける奴隷の調達が可能であり安価であり、奴隷貿易が大きな収益をもたらす継続的な事業であったことがわかる。また、その値段は奴隷に子どもを生ませて養育する費用よりも安かった。結果として奴隷人口の再生産の必要性を減少させ、奴隷に対する非人間的な扱いが助長された。「輸入された奴隷の大部分が成人男性であり、その男女の性別比が著しく不均衡であった…ために、人口上の再生産を阻害する初期条件が与えられた…。しかも、この初期条件が持続し構造化したのである。奴隷制プランテーションにあっては奴隷どうしの結婚が奨励されていなかったし、むしろ家族形成が阻害されていた」(池本幸三編『近代世界における労働と移住』阿咩社, 1992年, 136頁)。
- 20) イギリスは「ウィーン会議での公約と、どこかの安価な奴隷労働力がイギリスの産業競争力を弱めるのではないかという懸念から、奴隷貿易を終わらせたいと考えていた」アンソニー・W・マークス(富野幹雄・岩野一郎・伊藤秋仁訳)『黒人差別と国民国家』春風社, 2007年, 91頁。
- 21) 条約が批准されたのは1827年3月。そのため発効は1830年3月から。
- 22) ファウスト, 前掲書, 154頁。
- 23) 奴隷貿易商に対する告発がなされても有罪になることはなかった。当時進められた地方分権により、県内で行われた裁判は、「大農園主の言いなりになる陪審員たちによって無罪判決が下された」(同書, 155頁)。
- 24) 当時のイギリスの外相の名をとり、ブラジルでは同法を「アバディーン法」と呼んでいる。
- 25) 同法は法案を提出した外相の名から「エウゼビオ・デ・ケイロス法」と呼ばれている。同法の効果は絶大であり、「1849年に5万4,000人に上った輸入奴隷数は、1850年には2万3,000人、1851年には3,300人に減り、翌年からは事実上ゼロとなった」(ファウスト, 前掲書, 157頁)。
- 26) 1850年に約250万人であった奴隷人口は、1864年に約175万5,000人に、1872年には151万人に減少した(池本編, 前掲書, 162頁)。
- 27) 1871年には女性の奴隷から生まれた子どもを、元の主人のために21歳まで働くという条件で自由人とする新生児自由法が定められ、1885年には60歳以上の奴隷を解放する「セクスジェナリオス法」が公布された。その後、1888年、奴隷制を即時廃止する「黄金法」が公布された。1887年時点で、64万人ほどの奴隷が存在していたが、実のところ彼らは何の社会的保障もないまま放たれ、社会的な低位に留まることになった。
- 28) 新たな労働力としての自由労働者の雇用は1840年ごろから始まっていた。1847年にはサン・パウロのイビカバ農場にて、農場主と小作人の中で収益を分ける刈り分け小作制度によるヨーロッパ人移住者が導入されたが、不首尾に終わった。奴隷に代わる労働力として移住者の導入を行ったこの試みは、ニコラウ・ベレイラ・デ・カンボス・ヴェルゲイロ上院議員によって自身の所有する農場で行われた。彼はそれまで国策として行われていたヨーロッパ人移民に対する国有地の譲渡に反対し、分益制による移民の自由労働者の導入を図った。1847年6月、ドイツ系スイス人を含むドイツ人306人が同農場に導入された。農場主は渡航費・諸経費を支給し、分益農は、コーヒーならびに自給用作物の余剰分を販売し、その利益を折半するという契約で行われたが、奴隷制度が強固であった時代に、奴隷労働力と分益農を併用するという形態には無理があり、次第に齟齬を生じさせた。使用者による度重なる不正や締め付けに対し、移民は不満を募らせ、1856年、武装蜂起した(「分益農の反乱」として知られている)。この事実はブラジル社会に大きな衝撃を与え、分益制という制度そのものの否定に結びついていった。Memorial do imigrante (coord.), *Imigração Alemã no Brasil*, São Paulo, Museu da Imigração, 2000, pp 23-25 を参照のこと。

- 29) 「この法律の真の意味は、やがて到来するであろう移民が容易に土地を取得できなくすることにあった。公有地は、貧しいポセイロ（占有農民）や移民には手が届かないような価格で販売されることになったのである。また、渡航費の補助を受けた外国移民には、ブラジル入国後3年間は土地の取得を禁じた。要するに、大農園主は奴隷に代わる労働力として移民を望み、移民が短期間で土地を取得するのを阻止しようとしたのである」（ファウスト、前掲書、158頁）。
- 30) Alvim, Z. M. F., “O Brasil Italiano”, Fausto, B. (org.), *Fazer America*, São Paulo, Editora da Universidade de São Paulo, 1999, p.397 および França, Ary, *A Marcha do Café e as Frentes Pioneiras*, Rio de Janeiro, Conselho Nacional de Geografia, 1960, pp.16-17. サン・パウロ内陸部から西部にかけては、1908年に移住を開始した日本人移民の主たる入植地が見られる。
- 31) サン・パウロ州政府は、1871年には農業に従事するために家族でブラジルにやってくる移民に対しすでに渡航費の支給を行っていた。また「1881年の初めには、（サン・パウロ）県政内で相当の地位にあった農場主たちは、政府に移民の渡航費の半額を負担させることに成功した。そして1884年3月付け第28法令により農業雇用労働者と小土地所有者の目的地までの移動費全額が負担されることになった」（Alvim, op. cit., p. 385）。
- 32) 本協会の活動期間は1891年まで。機関紙では、ブラジル黒人や混血人を劣った者たちであり、すぐれたヨーロッパ人労働力の導入がまさに必要であるとの論陣が張られた。Oliveira, L. L., *O Brasil dos imigrantes*, Rio de Janeiro, Jorge Zahar Editor, 2001, p. 16を参照のこと。
- 33) 同協会の創設には農場主でありながら、県政や国政に大きな影響力を持つ政治家のアントニオ・ダ・シルヴァ・ブラド、同氏の弟マルティニョ・ブラド・ジュニオル、ニコラウ・デ・ソウザ・ケイロス、ラファエル・デ・パロスらが関わった。
- 34) Oliveira, op. cit., p. 18.
- 35) 1815年よりブラジルでは行政単位として県が設置された。共和制移行後の1891年より州となった。
- 36) 1889年、ブラジルは君主制から共和制に移行したが移住ならびに入植政策については1890年6月28日付第528法令（同法を主導した農業・商業・公共事業大臣であるフランシスコ・グリセリオ將軍の名をとりグリセリオ法とも呼ばれる）により、帝政時代の政策の継続が制定された。しかしながら共和制下での最初の憲法である1891年憲法により連邦制が採用されると、未開発地の所有権は州へと移行し（64条）、移民・入植のイニシアチブも州が行うようになった。共和国政府が再び移民・入植に関与するのは1907年以後である。
- 37) ヨーロッパ人移民にとっての渡航先の選択肢にはブラジル以外に米国やアルゼンチンがあり、ブラジルに誘致するには補助金の存在が大きかった。サン・パウロ以外の州で移民に補助金を支給する州はほとんどなかった。
- 38) 代表的な仲介者にカエタノ・ピントがいる。彼は1874年ブラジル政府と10年間で10万人の入植者を導入する契約を締結した。カエタノ・ピントは主としてイタリアで募集活動を行った。イタリア出国者の背景については拙稿「ブラジル南部におけるイタリア人の入植」『COSMICA』39号、京都外国語大学、2010年、123-124頁参照のこと。
- 39) 移民促進協会は、州からの資金援助を受け、移民の渡航費用を海運会社に支払った。海運会社にとっては、一度に移送する移民の数が多ければ多いほど利益が大きくなった。
- 40) 移民促進協会が仲介した移民の数はそのうち約22万人であるとされている（Alvim, op. cit., p. 395）。
- 41) *ibid.*, p. 395.
- 42) 「1902年の調査によれば、ブラジル全体でイタリア国籍保有者が110万人在住する中で、サンパウロ州の在住者は65万人（59%）を占めており、この約6割がヴェーネト出身者であったと推定される」（北村暁夫「ヴェーネトからブラジルへ」山田史郎ほか『移民』ミネルヴァ書

- 房, 1998年, 49頁)。
- 43) Alvim, op. cit., p. 396.
 - 44) *ibid.*, pp 399-400.
 - 45) 報酬は二つに分かれていた。一つは収穫までの手入れに対して、もうひとつは収穫に対する報酬であった。刈り分け小作制度のように収入の額が収益に左右されるのではなく、報酬額が明確であった点で異なっている。ファウスト, 前掲書, 239-240頁を参照のこと。
 - 46) 1905年のデータは州内の175の行政区における土地所有調査によるもの。一方、1920年のデータは農業畜産統計と名づけられた全国調査による(Alvim, op. cit., p. 396)。
 - 47) 同農場で就労する条件で渡航費などが立て替えられた場合、農場を移る場合にはその代金も負債になった。
 - 48) 「隔絶された空間で、農場主はコロノに対してさまざまな規制を課し、コロノの行動を束縛した。郷里との手紙のやり取りは農場主の許可制とされ、新聞を読むことや集会や祭りを開催することは許されなかった。また賃金の支給が現金払いでなく日用品の支給で代替されること(トラック・システム)や、就寝と起床の時間が指定されることもあった」(北村, 前掲書, 57頁)。
 - 49) 「1873年の10キログラム9,161レイスから1879年になると5,374レイスへと価格が下落した形で現われた」(富野幹雄「ブラジルにおけるコーヒー価格維持政策」『アカデミア』文学・語学編第23号, 南山大学, 1976年, 258頁, 以下「コーヒー価格維持策」と略す)。
 - 50) この命令は、イタリア出移民委員会の委員長の名を取って、プリネッティ命令と呼ばれている。この命令は一定の効力を持ち、ブラジルへの大量移住の流れは途絶えさせた。しかしながらブラジルへの移民を希望するイタリア人は非合法な形で渡航費の援助を受けてブラジルに渡った。この命令については、ブラジル側の要因だけでなく、「イタリアにおける社会的・経済的状況の改善も与っていた」(ファウスト, 前掲書, 234頁)との指摘もある。
 - 51) 富野, 「コーヒー価格維持策」259-263頁を参照のこと。
 - 52) Trento, A., *Do outro lado do Atlântico*, São Paulo, Livraria Nobel, 1989, p. 116.
 - 53) 1891年から1895年の間、サン・パウロにおいて補助金を受けた移民の数は全体の89パーセントを占めた(*Ibid.*, p. 28)。
 - 54) Alvim, op. cit., p. 404.
 - 55) Cánovas, M. D. K., *Imigrantes Espanhóis na Paulicéia*, São Paulo, a tese apresentada ao programa de pós graduação da Universidade de São Paulo, 2007, pp. 57-59.
 - 56) 「1907年、自国からサン・パウロへの出移民に興味をもったイタリア人社会主義者ジナ・ロンブロゾは、この町(サン・パウロ)ではイタリアのどこかの町と同じようにイタリア語が話されるのを耳にすることは間違いない」(Alvim, op. cit., p. 404)。ブラジル生まれのイタリア人移民2世、3世はブラジル国籍を有しているためイタリア人でなくブラジル人とみなされるため、イタリア人の影響は人口統計に現れる以上に大きかった。
 - 57) *ibid.*, p. 404.
 - 58) *ibid.*, p. 404.
 - 59) *ibid.*, p. 405.
 - 60) 「1901年2月、アントニオ・ベンテアド氏がオーナーである織物工場サンタナの女工600人が、給与平均を実質的に減らす職種別給与表の導入に反対してストライキを行った。…ストライキ開始後3日、際立った影響力をもつ職工のジウゼピナ・クトロが興奮して議論したという理由で逮捕された。1年後の1902年、今度はボン・レティロの織物工場アニャイアの女工たちが副工場長の専横に抗議してストライキを宣言した。…このストライキは開始一週間後、女工たちの勝利で終わった」(*ibid.*, p. 407)。その後、サン・パウロ市内で発生したストライキの多く

- が織物、食品、縫製の工場であり、その従業員のほとんどが女性であった。
- 61) 同法により、1907年だけで132人の外国人が追放された。1921年までの残りの14年間で追放された数が424人であることから、この年に追放された外国人の数は突出して多い (Batalha, C., “Limites da liberdade: trabalhadores, relações de trabalho e cidadania durante a primeira república”, Libby, D. C. & Furtado, J. F. (org.), *Trabalho livre, trabalho escravo*, São Paulo, Annablume, 2006, p. 106)。1890年から1920年のサン・パウロ州の労働組合のリーダーのうち82パーセントが外国人でその61パーセントがイタリア人であった。そして決して少なからぬ数のイタリア人が国外へ強制退去させられた (Alvim, op. cit., p. 407)。
- 62) *ibid.*, p. 405.
- 63) 北原敦編『イタリア史』山川出版社, 2008年, 6-7頁。
- 64) Cenni, F., *Italianos no Brasil*, São Paulo, Editora da Universidade de São Paulo, pp. 327-328.
- 65) Alvim, op. cit., p. 409.
- 66) *ibid.*, p. 415.
- 67) Oliveira, op. cit., p. 36.
- 68) Alvim, op. cit., p. 415.
- 69) Trento, op. cit., pp. 142-143. 1962年のデータでも、イタリア系の企業の割合は34.8パーセント、ドイツ系は12.8パーセントで、ポルトガル系が11.8パーセントであった。
- 70) Francesco Matarazzo (1854-1937)。

参考文献

- 池本幸三編『近代世界における労働と移住』阿吽社, 1992年.
- 伊藤秋仁「19世紀前半のブラジルにおける外国人入植者の導入」京都外国語大学『COSMICA』38号, 2009年.
- 「ブラジル帝政によるドイツ人の入植」京都外国語大学国際問題研究会『Problemata Mundi』18号, 2009年.
- 「ブラジル南部におけるイタリア人の入植」京都外国語大学『COSMICA』39号, 2010年.
- 「ブラジルにおけるスペイン人移民の可視性」京都外国語大学国際問題研究会『Problemata Mundi』21号, 2012年.
- 小澤卓也『コーヒーのグローバル・ヒストリー』ミネルヴァ書房, 2010年.
- 北原敦編『イタリア史』山川出版社, 2008年.
- 金七紀男『ポルトガル史』彩流社, 1996年.
- 佐藤常蔵『ブラジルの移民史』帝国書院, 1964年.
- シーガル, ロナルド (富田虎男監訳)『ブラック・ディアスポラ』明石書店, 1999年.
- タネンバウム, フランク (小山起功訳)『アメリカ圏の黒人奴隷』彩光社, 1980年.
- テルズ, エドワード・E. (伊藤秋仁ほか訳)『ブラジルの人種の不平等』明石書店, 2011年.
- 富野幹雄「ブラジルにおけるコーヒー価格維持政策」『アカデミア』文学・語学編第23号, 南山大学, 1976年.
- 「19世紀ブラジルの経済発展とコーヒー生産」『アカデミア』人文・社会科学編第66号, 抜刷, 南山大学, 1997年.
- 富野幹雄ほか『ブラジル』啓文社, 1991年.
- 富野幹雄ほか編『ブラジル学を学ぶ人のために』世界思想社, 2002年.
- 中川文雄ほか編『ラテンアメリカ人と社会』新評論, 1995年.

- 南山大学ラテンアメリカ研究センター編『ラテンアメリカの諸相と展望』行路社, 2004年.
- ファウスト, ボリス (鈴木茂訳)『ブラジル史』明石書店, 2008年.
- ペンダーグラスト, マーク (樋口幸子訳)『コーヒーの歴史』河出書房新社, 2002年.
- 細野昭雄『ラテン・アメリカの経済』東京大学出版会, 1983年.
- マークス, アンソニー・W. (富野幹雄ほか訳)『黒人差別と国民国家』春風社, 2007年.
- メジャフェ, R. (清水透訳)『ラテンアメリカと奴隷制』岩波書店, 1979年.
- 毛利健三『自由貿易帝国主義』東京大学出版会, 1978年.
- 山田史郎ほか『移民』ミネルヴァ書房, 1998年.
- 山田陸男編『概説ブラジル史』有斐閣, 1986年.
- 横山隆作『ブラジル労働運動の生成』学文社, 2001年.
- 蠟山道雄ほか編『新しいヨーロッパ像を求めて』同文館, 1999年.
- ワイルド, アントニー (三角和代訳)『コーヒーの真実』白揚社, 2007年.
- Andrews, George Reid, *Blacks and Whites in São Paulo Brazil 1888–1988*, Madison, 1991.
- Azevedo, Tales de, *Italianos e Gaúchos*, Rio de Janeiro, Livraria Editora Cátedra, 1982.
- Barreto, Castro, *Povoamento e População*, Rio de Janeiro, Livraria José Olympio Editora, 1959.
- Brandão, Paulo Roberto Barqueiro, *Geografias da presença galega na cidade da Bahia*, Salvador, EDUFBA, 2005.
- Cano, Wilson, *Raízes da Concentração Industrial em São Paulo*, São Paulo, T. A. Queiroz, 1981.
- Carone, E., *A República Velha I*, São Paulo, Difusão Européia do Livro, 1972.
- Cánovas, M. D. K., *Imigrantes Espanhóis na Paulicéia*, São Paulo, a tese apresentada ao programa de pós graduação da Universidade de São Paulo, 2007.
- Cenni, F., *Italianos no Brasil*, São Paulo, Editora da Universidade de São Paulo.
- Couto, Ronaldo Costa, *Matarazzo*, São Paulo, Planeta do Brasil, 2004.. 2 volumes.
- Diegues Júnior, M., *Etnias e culturas no Brasil*, Rio de Janeiro, 1976.
- Fausto, B. (org.), *Fazer America*, São Paulo, Editora da Universidade de São Paulo, 1999.
- França, A., *A Marcha do Café e as Frentes Pioneiras*, Rio de Janeiro, Conselho Nacional de Geografia, 1960.
- Graham, Douglas H. & Hollanda Filho, Sergio Buarque, *Migrações Internas no Brasil 1872–1970*, São Paulo, Instituto de Pesquisas Econômicas, 1984.
- Hutter, L. M., *Imigração Italiana em São Paulo (1880–1889)*, São Paulo, Publicação do Instituto de Estudos Brasileiros-USP, 1972.
- Instituto Brasileiro do Café Departamento Econômico Programa de Formação de Pessoal (coord.), *Curso de Economia Cafeeira tomo I*, Rio de Janeiro, Figliati Artes Gráficas, 1962.
- Jochem, T. V. & Alves D. B., *São Pedro de Alcântara*, São Pedro de Alcântara, Prefeitura Municipal de São Pedro de Alcântara, 1999.
- Kittleston, R. A. *The Practice of Politics in Postcolonial Brasil*, Pittsburgh, University of Pittsburgh Press, 2006.
- Lambert, J., *Os dois Brasis*, São Paulo, Editora Nacional, 1967.
- Libby, D. C. & Furtado, J. F. (org.), *Trabalho livre, trabalho escravo*, São Paulo, Annablume, 2006.
- Luebke F. C., *Germans in the New World*, Urbana and Chicago, University of Illinois Press, 1990.
- Memorial do Imigrante (coord.), *Imigração Alemã no Brasil*, São Paulo, Museu da Imigração, 2000.
- Monteiro, Norma de Góes, *Imigração e Colonização em Minas 1889–1930*, Belo Horizonte, Imprensa Oficial Belo Horizonte, 1974.
- Mulhall, M. G., *Rio Grande do Sul and its German Colonies*, Adamant Media Coporation, 2005.

- Nicoulin, M., *A genese de Nova Friburgo*, Rio de Janeiro, Fundação Biblioteca Nacional, 1995.
- Novais, F. A. (coord.), *História da vida privada no Brasil 1*, São Paulo, Companhia das Letras, 1997.
- História da vida privada no Brasil 2*, São Paulo, Companhia das Letras, 1997.
- História da vida privada no Brasil 3*, São Paulo, Companhia das Letras, 1998.
- Oliveira, L. L., *O Brasil dos imigrantes*, Rio de Janeiro, Jorge Zahar Editor, 2001.
- Pereira, João Baptista Borges, *Italianos no Mundo Rural Paulista*, São Paulo, Pioneira, 1974.
- Rossi, C. D. A., *Brasil: integração de raças e nacionalidades*, São Paulo, Editora C.L., 1991.
- Saes, F. A. M., *As ferrovias de São Paulo 1870-1940*, São Paulo, Editora Hucitec em convênio com o Instituto Nacional do Livro, Ministério da Educação e Cultura, 1981.
- Silva, Z. P., *O Vale do Itajaí*, Rio de Janeiro, Serviço de Informação Agrícola, 1954.
- Trento, A., *Do outro lado do Atlântico*, São Paulo, Livraria Nobel, 1989.